

大学出版会 2025J 組織の調査報告

同志社大学 社会学部 社会学科
藤本研究室
林 颯太郎

本調査では、以下の3つの質問項目に沿ってインタビューを進めた。「2025J 組織および部署の特徴」、「AI の利用状況と環境の変化」、「学術出版業界と AI の今後」の3つである。

まずは 2025J 組織の特徴について述べていく。インタビュー対象者である j 氏の部署は編集と営業の業務を担っており、職員の男女比は 1:2 である。30 代~70 代が雇用されていて年齢層は高く、そのうち約半数が非正規雇用で大学職員と兼務して働いている人である。2025J 組織は大学出版部であるため、大学の先生からの原稿の持ち込みや査読の依頼、先生からの紹介での採用など、大学出版会特有のネットワークを活かした幅広く、連帯感のある活動ができる点が強みである。

AI の利用状況については、j 氏は出版社として「良い本」を出すことを 1 番の目標としており、その考えから個人としては AI を積極的に利用しているが、2025J 組織全体として体系的に導入しているわけではない。j 氏の AI 利用は、企画検討や販促物作成が主な用途であり、具体的には、メール文の作成や本の書籍のタイトルの比較、宣伝文の作成、文献リストの整理、資料の要約など様々なものに利用している。これらの業務を補助させている理由は、AI が情報の要約に長けているところにある。しかし、AI を業務に活用するうえでは複数の課題がある。まず、AI に書籍のタイトルの作成を 0 から提案してもらおうとしても、言葉選びの斬新さや語呂の良さに優れる魅力的なタイトルを必ず出力できるわけではないので、あくまで人間が考えた案を分析・検討させるにとどまっている。タイトル作成や書籍のデザインなどの、人の感覚に訴えかけるように作らなければならない部分については、AI の精度はまだ不十分であり人の手に頼る必要がある。また、編集業務を AI に補助させる際に気をつけていることは著作権や情報保護に関する問題である。AI には入力した情報が漏れないようにする「入力内容を学習しない機能」があるが、権利侵害や情報漏洩については信じきれない部分もあり、基本的には自分が作った文章に限り AI に入力している。学習された著作物の内容が漏洩することがあれば、それを預かる立場としての信用問題になるからである。他にも、著者が AI に対して寛容的であるか、AI 利用による人間同士のコミュニケーション頻度の低下といった点も、AI を利用していくうえで重要な課題である。

AI の今後について、j 氏は AI の利用によって誰かの権利を不当に害するようなことがなければ、利用していくこと自体は悪くないと考えており、著者や出版業界からも AI の利用は受け入れられてきていると感じている。昨今の出版状況と原価高騰により、本 1 冊を作るのにかけることができる労力が減ってきているという現状のなかで、2025J 組織は出版のコストを抑えることを求められている。j 氏はもし AI の利用制限をするならば「AI を使うな」などの『禁止』を伴うものではなく、AI と『共存』するためのルールを敷きながら使っていきたいと考えている。出版業務に AI を活用する際に必要な視点は、本における商品としての価値と学術的な価値を守ることであり、AI 利用が当たり前になった社会で育ってきた人が台頭してきたときには、守るべきリテラシーや倫理観を明確化し伝えることが重要である。また、j 氏から今後利用していきたい AI の機能についての話があっ

た。具体例としては、NotebookLM（Google が提供する AI ツール）を用いて行う読者 1 人ひとりの要望に合わせた書籍のレコメンドサービスや、書籍広報のための企画の立案やブラッシュアップなどである。

今後、出版社としての価値や生命線は、出版物の内容を精査し正確な情報を提供する点により大きく現れてくる。その部分に関しては、AI を使用する際には特に出版社として守っていかなければならない点である。また、出版物の内容にインパクトを持たせるため、どこを強調すれば良いかを見極めるセンスも重要である。適切な情報と指示を与えることで現在の AI でも良い提案をする可能性はあるが、書籍の価値を高める作業は人の手によるもののほうが AI によるもの良いと J 氏は意識していた。



***イメージイラストは AI で生成**